
4月。

季節は巡り、風に舞う白い欠片は、薄紅の桜の花びらへと姿を変えた。

オレは、慣れぬスーツと、長い入学の式典ですっかりこわばってしまった体で伸びをし、大きく息を吐いた。

「...はあ。随分長い入学式だったなあ...大学の式ってのはこんなに長いもんかね」

まあ、式で一番長かったのは、学校創立の発案者兼初代総代の、大木玲夜の私情交じりの挨拶だったのだが。

本当、生徒会選挙の時の公約が果たされるなんて思わなかったぞ。

私立ドキドキ学園大学。

日本有数の大企業、大木グループが、学業支援...という名の息子のワガママによって創設した、出来立てホヤホヤの学校である。

ワガママで創設されたとは言え、その教育及び研究内容はかなり充実されており、学部・学科も政経

や教育、商業といった、基本を押さえたものは勿論、芸術やスポーツ科学など、多岐に渡っている。(後半はパンフレットの受け売りだ)

近隣大学との交流も進められているが、おそらくそれは大木個人の私情が入ってるからだろう。

それはさて置き、オレはその中でも、スポーツ科学部に籍を置く事になった。

詳しい事はよく分からない(長々と小難しい言葉での説明は受けたが、半分以上忘れた)が、運動能力や体質などのデータを取るのにオレの体は丁度いいらしい。

...それは、学生、というより試験体と呼ぶ扱いなんじゃなかるうか、という疑問も浮かんだが、他の

同じ学科の生徒が受けたい、難しい筆記試験などがほぼ免除されていた(後で聞いたが、特例らしい)

い)ので、結果オーライである。

...と、この間夕利に言ったら、アンタはもう少し考えて行動しなさい、と叱られた。

『太臈に指南を請けようとしたり、サイボーグになろうとしたり...そういうの常識で考えたら、おかし

いって事気付かなきゃ』

けどその後、オレが返した言葉には、真っ赤になってうなずいたのだが。

その様子を思い出し、つい顔がにやついてしまう。ああチクショウ、可愛すぎるだろ全く。

後の乱れっぷりも...っと、ダメだ、これ以上思い出してたらさすがにヤバイ。

大学構内という、衆人環視の中であることを思い出したオレは頭を振ると、待ち合わせに指定して

いた場所へと足を向けた。

散り際の桜の花びらが、ふわりふわりと風を纏わせる中、オレは足のペースを、早足から小走りに変える。

もうすぐ、会える。そう思ったら、ゆっくりなんてしてられない。

同じような格好の、新入生の人波を抜け、目指す所には見覚えのある人影があった。

「む、噂をすれば 『スポーツ学科のモルモット』 が来たようだぞ」

最初に気付いたのは、喪服のような黒いスーツに身を包んだ、安骸寺だった。

何の噂をしていたんだか。

「まあ、一箇所でも特化した能力があるなら特に文句は無いけれど、問題はアンタ達ね。この学校、倍

率そんなに低かったのかしら」

言葉を受け、辛辣な言葉で嘆くのは、高校時代は良い成績をおさめていた佐渡だ。そういや、家庭の事情で家から近い大学を選んだって噂は聞いてたな。

「アンタ達って...まさかオレまで勘定に入れてねえだろうな？冗談じゃねえぞ」

佐渡の言葉に不快な表情を見せるのは、阿久津。

「少なくとも、コイツらと一緒にされちゃ迷惑だ」

足元を見、苦々しげに言葉を吐く。そこには季節にそぐわない氷の塊が二つ、転がっていた。なんか人が凍ってるみたいにでかい氷だけど　あまり考えるのはやめとこう。

そんな阿久津をまあまあ、となだめるのは、隣に立つ矢射子先輩。

同学年になっても先輩、と呼ぶのも何だか妙だが、オレにはこの呼び名が一番しっくりくるのだ。

「入学早々、あまり苛立たないほうがいいわよ。それに、宏海がちゃんと勉強してたのは、わかってるから」

「意味深だな」

「白昼堂々熱いわね。ごちそうさま」

平然と茶化す言葉に、揃って顔を赤らめる二人は、付き合って一年近く経とうとしているが相変わらず

ずどこか初々しい。

オレは、そんな二人を見ても、以前ほど胸を痛ませる事はなかった。

そして、

「遅かったじゃない。結構キャンパス内広かったから、迷ったの？」

と、オレに向け言葉を掛けるのは、特徴的だった前髪のワンポイントを外した、夕利。

「スポーツ学科の建物は、随分離れてるらしいな。残念だったな」

安骸寺のからかいに頬を染めつつも、矢射子先輩の影からぴょこんと現れたスーツ姿の夕利は、

まだ子どもっぽさが抜けてないが、それでも、どことなく成長したようで。

微かに感じる　オレだけが感じていると思っていればいいと、こっそり願っているのだが色気

に、胸が高鳴った。

先のことなんて、まだよくわからない。

何も変わってないようで変わり続けるのが、日常だというのなら尚更に。

だけど、この新しい生活の中でも、変わらないオレたちで居られたら。

もっと先も、変わり続ける周りの中で、変わらない二人で居られたら。

オレは心の中で願い、甘酸っぱい香りが漂う4月の風を吸い込むと、待っていてくれた面々に向け、

声を掛けた。